

2013.5.17 No.16



なみえの未来をしえん

春の浪江町



震災から3回目の春が訪れた浪江町で咲き誇る請戸川沿いの桜並木。右下は5月5日に避難指示解除準備区域内にある浪江町役場本庁舎前に掲げられた100匹の鯉のぼり。 ※いずれも浪江町から写真提供

日本赤十字看護大学が日本赤十字社と協働して実施している健康調査支援事業は、既に福島県による調査が実施されているとして未調査であった3歳以下または65歳以上の方を含む世帯につきましても、本年4月からは訪問調査を実施することとなりました。いわき市内に避難されている浪江町の住民は2,000名を超えていますが、3月末までに調査が終了したのは約1,000名となっています。この事業は昨年10月から今年9月末までとなっていますが、浪江町の方に対する支援の必要性は依然として高く、10月以降の支援の在り方について、本学では浪江町と協議を重ねています。



浪江町の檜野副町長(右から2人目)と紺野健康保険課長を訪問した守田学部長(左奥)と内木講師(左手前)



2013.5.10 No.15

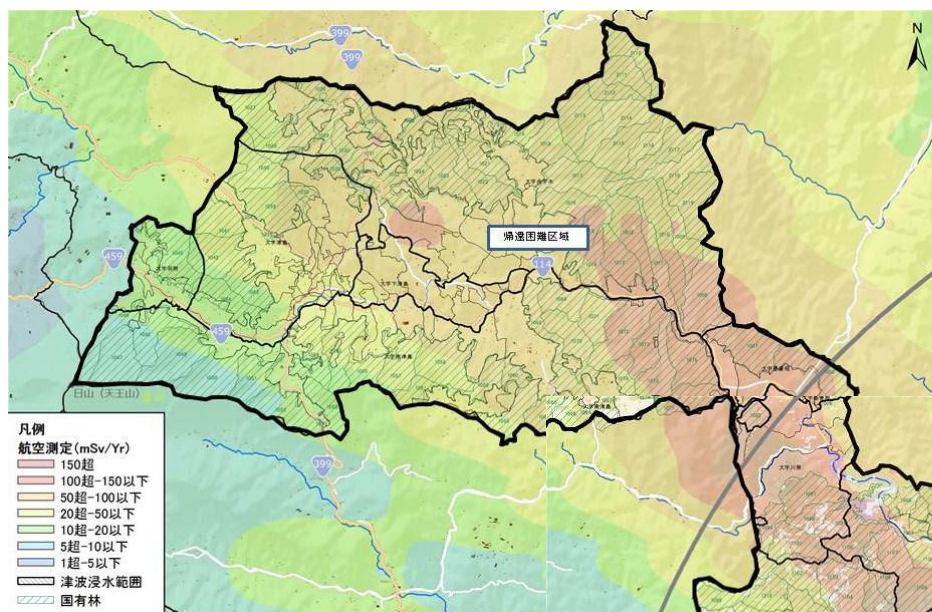


なみえの未来をしえん

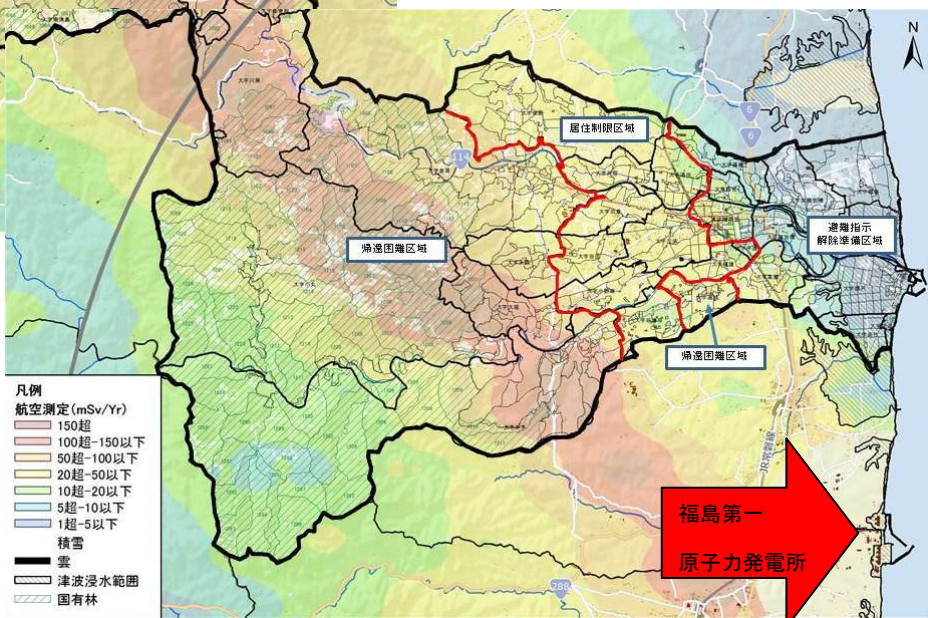
浪江町区域再編

平成 25 年 4 月 1 日午前 0 時、全域が避難区域となっている浪江町は、「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」「帰還困難区域」の 3 区域に再編されました。

【地図は浪江町ホームページから】



避難指示解除準備区域とは年間積算線量が 20 ミリシーベルト (mSv)を下回るとされる地域であり、**居住制限区域**とは年間積算線量が 20mSv を超えるおそれのある地域です。いずれの地域も、4 月 1 日から日中の立入りが可能となりました。一方、**帰還困難区域**とは年間積算線量が 50mSv を超えるおそれのある地域であり、住民の立入りも月 1 回に制限されています。なお、再編後においても避難指示は継続中であり、自宅であっても宿泊することはできません。今回の区域再編により、浪江町では、住民の早期帰還に向け、除染やインフラの復旧などの環境整備を進めていくこととしています。



震災から 2 年が経過した浪江町（平成 25 年 3 月 11 日撮影）

津波被害がいまも残る原発に近い請戸地区（写真左）と浪江町中心街（写真右）



2013.4.12 No.14



なみえの미래をしえん

なみえのいまと私たち (日本赤十字看護大学 澤井美奈子)

いわき市に避難している方々への福島県による支援活動は、災害時要援護者と言われる乳幼児や高齢者、健康上の課題をお持ちの方のいる家庭から始まりました。それを引き継ぐかたちで始まった私たちの活動の主な訪問先は、一般的には身体的にも社会的にも元氣とされる世代が中心です。職場にうかがう場合もあります。休日には、学校に通う子どもさんからご両親まで一緒にお会いすることもあります。

これまでの訪問のうち、4割以上の方が震災の影響で仕事を失ったり変えたりしたという報告もあります。元の職場で再び働けるようになったというお話には一緒に嬉しい気持ちになります。でも震災の影響で元の職場に戻れない方は、今も模索し続けています。課題は年代によっても異なり、若い方は「被災してやっと慣れた初めての仕事や同僚という小さなコミュニティを失い、何回も避難して、見知らぬ大きな町でまた新たな仕事を探す一歩を踏み出すのはとても大変」と話され、ご年配の方は「本当はすごく働きたいけどこの歳になったら仕事も見つからないし、前と全然違う仕事は若い人みたいに覚えられないしねえ」と話されます。自分が同じ状況だったらと考えてしまいます。

いわき市は浜通りでは都会で、商業施設へのアクセスは良好です。そのかわり浪江町に比べ一般的に住宅面積は狭くなっています。震災から2年、半数以上の方は食事や飲酒習慣が震災前とほぼ同じに落ち着いたといいますが、運動量が減った、体重が増えたという方が半数。血圧が高い方も目立ちます。畑や庭仕事ができず、毎日の掃除面積が減り、長期的には生活習慣病も心配です。現地で心のケアに携わっている方からは、出生数は決して多くないなかで発達障害の子どもが増えてきている印象を受ける、と聞きました。これにもお父さんお母さん世代がおかれている環境の影響があるようです。働く（働いていた）世代の方々の抱える課題が改善されていくことを願ってやみません。1人の人として繋がり、また活動メンバーとして現地の状況や皆さんの思いを多くの方々に発信していきたいと思います。



震災の爪あとそのままの浪江町の今

(車はAKB48が東北3県に寄贈したAKBusの1台)



イルミネーション輝くいわきの駅前通りの夜



2013.4.5 No.13



なみえの未来をしえん

海外からの応援団(2)

前号に引き続き、バングラデシュ、タイ、インドネシアの赤十字関係者ら9名による2月5日、6日の被災地（二本松市、いわき市）訪問の続報です。

1日目は、二本松市内にある浪江町の応急仮設住宅を訪問し、避難者の方々との活発な意見交換が行われました。多くの方がご年配の一人暮らしの方でしたが、浪江町からの避難の状況や現在の生活の様子など、訪問メンバーからの熱心な質問の一つひとつ丁寧に答えていただきました。また、併設されている診療所では、医師から避難者の健康状態について説明を受けました。その後、同市内に移転中の浪江町役場にて馬場有町長を表敬訪問しました。仮設住宅には高齢者が多く、被災前には1,400人を数えた浪江町の子どもたちは、今では半数が県外へ避難し、県内に残った者も各地に離散して避難生活を送っているとの町長の説明に対し、バングラデシュ赤新月社本部のモシン・ウデイン・アーメット保健部長は「子どもたちが町に戻って来られるような対策を一緒に考えていきましょう」と発言されました。馬場町長からは支援に対する感謝とともに「このような災害が起きないよう世界に広く発信してほしい」と思いを託されていました。

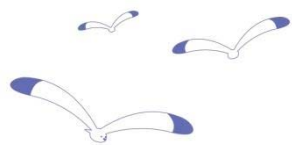


避難者とすっかり打ち解けるメンバー



ボランティアに教わりながら杵を握る
インドネシア赤十字社のハビブさん

2日目は、いわき市内の日赤いわき事務所に移動し、浪江町の住民ボランティアによる歓迎の餅つきが行われました。住民の方の身振り手振りによる指導を受け、訪問メンバーは、「ヨイショ！ヨイショ！」と大きな声をかけながら、順番に杵で餅をつき、餅を返す手伝いを楽しそうに行いました。朝から雪が降り出す生憎の空模様でしたが、威勢の良い掛け声の下、会場は熱気に包まれました。その日の昼食は、浪江町の方との交流も兼ねたお餅パーティとなりましたが、恐るおそる口にしてお餅も、最後にはお代りもするくらい好評でした。二日間同行していただいた浪江町職員主査の深野さんからは「皆さんの熱意に避難者の方もとても喜んでおられました」とのコメントを頂いています。別れ際には、「元気をもらえてありがとう」としっかりと手を握って話される避難者もいて、短いけれども中身の濃い2日間でした。



2013.3.29 No.12



なみえの未来をしえん

海外からの応援団(1)

赤十字は「人道・公平・中立・独立・奉仕・単一・世界性」という7つの基本原則のもと、188カ国におよぶ世界最大のネットワークを駆使して活動する人道機関です。発生から2年が経過した東日本大震災では、世界各地の赤十字社・赤新月社から日本の被災者のために多額の救援金が日本赤十字社に寄せられました。日本赤十字看護大学と日本赤十字社が協働で取り組んでいる浪江町民への健康調査・支援事業は、この海外救援金を財源に実施されています。

日本赤十字看護大学では2月初旬、自らも災害多発国でありながら救援金を寄せていただいたバングラデシュ、インドネシア、タイから赤十字関係者ら9人を日本に招待し、福島県内を訪問するとともに、いわき市に避難している浪江町民との交流を図りました。毎年のように地震やサイクロンの被害に見舞われる国から来日された9人は、町民の話に熱心に耳を傾けたり、自国での経験を身振り手振りを交え話したりしていました。



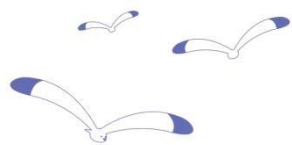
←浪江町の方は、つきたてのお餅を振舞ってバングラデシュ赤新月社 Mohsin Uddin Ahmed (モシン・ウデイン・アーメット) 保健部長(左)らを歓迎しました。

二本松市内にある浪江町役場では、馬場町長(前列左から4人目)を表敬訪問しました↓

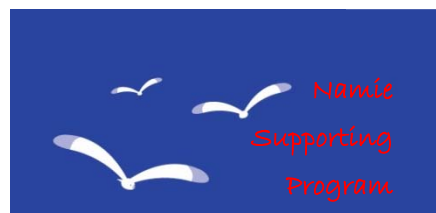


イスラム教国であるバングラデシュでは、十字はキリスト教を連想するとして、同国の赤十字組織は、赤十字の代わりに「赤新月」を使用しています。

←バングラデシュ赤新月社のロゴマーク



2013.1.25 No.11



なみえの未来をしえん

太陽と人のぬくもりを感じたいわき（日本赤十字看護大学 加藤めぐみ）

寒さが増々厳しくなってくる1月、幸いにも天候に恵まれ、いわき市は太陽の日差しがさんさんと降り注ぐ温かい2日間となりました。震災から間もなく2年が過ぎようとしている今、浪江町民の方の健康状態や人々の思いを伺いに、訪問してまいりました。

震災後は、家族の生活がばらばらになってしまったり、慣れ親しんだ土地や家を失ったり、避難中に親族が亡くなってしまったりと、町民の方は多くの悲しみを体験されていました。震災後1年目とは違い、借り上げ住宅の部屋の中は整理され、買い物や通学などの物的環境も整ってきていました。しかし一方で、「やっぱり外の人なのよね」「近所の人との交流は全然ないの」などといった声が聞かれ、精神的な面では落ち着かない現状が依然としてあるようです。また、生活における様々な利便がよくなったことで活動量が低下し、肥満や運動不足などから様々な身体的症状が生じており、それぞれの問題と向き合っている方も多くいました。

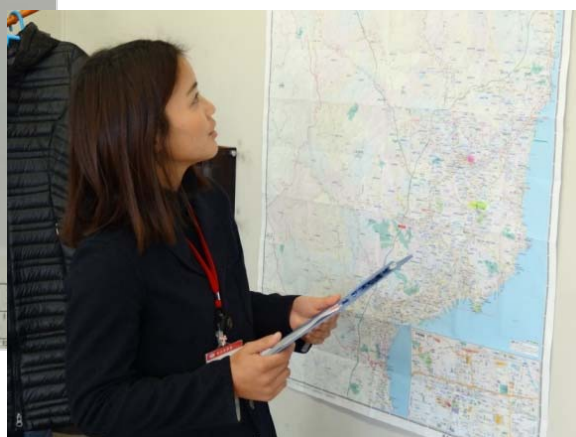
今回の訪問を通して、子供も大人も前を向いて力強く生きている姿がみられ、先の見通しが立たない中でも、とにかく今日を一生懸命生きる人々に出会うことが出来ました。震災から年月が経つにつれ、人と人、家族の絆はより一層強くなってきているのではないかと感じられ、人の強さ、家族の大切さを改めて実感しました。

「東京の人は震災のことなんて忘れちゃってるんだろ」と話された方の複雑な思いを忘れずに、支援を必要としている人に必要な支援が継続して行われるよう、そして、それぞれ自立した良い生活が送れるよう、何らかの形で引き続き関わっていきたいと思います。



▲原発事故前から暮らしてきた地域がどのような現状にあるかについて、浪江町の放射線量分布を事前に確認します

▼ 訪問前にいわき市内の地図を見る地域看護学領域の加藤めぐみ助手
地域看護学領域では、保健師の視点を活かし、災害で転居を余儀なくされた被災者の生活支援についても学びます





2013.1.18 No.10



なみえの未来をしえん

浪江支援活動に参加して（日本赤十字看護大学 乙黒千鶴）

震災後 2 度目のお正月が巡ってきました。新年のカウントダウンを喜ぶ私たちとは対照的に、被災地では支援終了のカウントダウンが始まっているかもしれません。震災直後の混乱期と比べ状況が落ち着いてきてはなお「仕事がない」厳しい状況が続きます。仕事を求め、家族がバラバラになっている家族。仕事はあっても人手不足で過重労働を強いられ「身体がもたない」と健康面が心配になる若い家族。仕事がないことが一番のストレスで酒量が増える人、仕事があり過ぎてストレスで酒量が増える人。訪問して様々な話を聞くことが出来ました。現在の場所に辿りつくまでに 4 回以上の移動は当たり前で、本当に転々とされ苦労が絶えなかった毎日。ようやく落ち着いた借上げ住宅であっても、住宅の特例措置は 1 年延期で 26 年 3 月末までとなり、4 月以降は自立を迫られている状況です。「仕事もなくて、この家にもずっとはいられなくて。」と先の見えない不安を一杯に抱えている方を前に、かける言葉はどれも空しく絞り出した「大変でしたね」が精一杯でした。仮設と借上との差別。借上アパートで 8 町村の住民だと分からないように気を使って苦労の絶えない生活。しかし、厳しい状況にもかかわらず元気に笑顔で「いつまでも皆さんに甘えてられないね。自立しなきゃね」と話す方もありました。今回の調査は、訪問予約をしてから何うので「待ってたよ」と言われ、お茶やお菓子が用意されているお宅もあり、和やかにお話を聞く時間も持てました。住民さんのおもてなしの心を有難く頂きました。調査を通して出会って、知って、考えて、伝えて。風化しがちな記憶を忘れ去らせない事と、繋いだ手を離すことなく寄り添い歩いて行くことが不安を抱える住民さん達への何よりの支援であることを肌で感じた 2 日間でした。



訪問前に、いわき市の日赤事務所にて入念な打合せを行う地域看護学領域の乙黒千鶴助教（中央）と加藤めぐみ助手。二人は、1 月 12 日～13 日に日本赤十字看護大学から派遣され、調査活動を実施しました。

地域看護学領域とは、地域に暮らす様々な個人、集団や組織、そして地域全体の健康と生活について研究・教育する分野です



2013.1.11 No.09



なみえの未来をしえん



浪江町の請戸漁港では、毎年1月2日に、大漁旗をなびかせた約100隻もの漁船によって、1年間の海上安全と豊漁を祈願する「出初式」が勇壮に行われていました。（現在は休止中です）

※浪江町ホームページより一部抜粋

地元との緊密な連携

健康調査・支援事業を進めていくうえでは、浪江町の保健担当者との意見交換や情報共有は欠かせません。いわき市にある日赤事務所では、月に1回、浪江町役場の移転先である二本松市から浪江町の保健師さんにお越しいただいて、一緒に話し合いを行っています。調査結果を浪江町の保健担当者に提供することにより、地域保健業務の補佐・支援を行ったり、緊急対応や継続観察支援が必要な住民の情報を把握し、健康問題の悪化防止につなげています。

浪江町は、福島県の双葉郡8町村の一つです。この双葉郡とその北に位置する南相馬市の地域保健行政を所管するのが、福島県の相双保健福祉事務所というところになります。今回の原子力発電所事故に伴い、双葉郡や南相馬市の住民の多くが、いわき市内に避難していることから、相双保健福祉事務所では、いわき市内に出張所を開設し、その後人員も増やして、避難中の方々の保健医療福祉サービスを県の立場から提供しています。

日本赤十字看護大学では、いわき市内で活動するにあたり、浪江町のほか、福島県(相双保健福祉事務所)とも情報共有を図り、住民一人ひとりや今後の町の保健福祉に役立つ健康調査の実施に努めています。



浪江・日赤連携会議には、現地に派遣中の調査員のほか、日本赤十字看護大学や日赤本社からも関係者が参加します



日本赤十字看護大学・日本赤十字社本社、浪江町、福島県（相双保健福祉事務所）が一堂に会する会議も開かれます

調査開始から 2 か月



今年 10 月 15 日に、いわき市内に浪江町民健康調査日赤事務所を開設し、調査を開始してから 2 カ月が過ぎました。初めは手探りの部分もありましたが、徐々に体制も整備され現在に至っています。これまでの調査（12 月 14 日現在）を振り返ると、

電話調査件数は、 **110** 人（浪江町からの情報を基に、事前に住民の方に電話しています）

訪問調査人数は、 **109** 人（いわき市内の借上住宅を訪問し、一人ずつお話を傾聴します）

合計調査人数は、 **219** 人 となっています。

また、この調査のために日本赤十字看護大学や全国の赤十字病院から派遣された

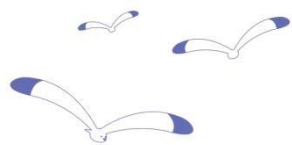
調査員数は、のべ **152** 人（日赤看護大や日赤本社、赤十字病院から派遣されています）

調査のためにいわき市内を走破した

走行距離は、 **172** km（1 時間以上かかる移動もあります）

に及んでいます。





2012.12.20 No.07



なみえの未来をしえん

日赤の総力を結集しています



活動拠点が設置されている
血液センター

調査に伴う事務処理のほか
ミーティングも頻繁に開かれます

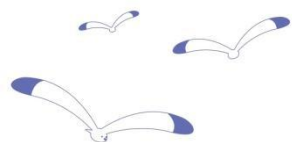


日本赤十字看護大学が実施している、いわき市内浪江町民健康調査は、事業の拠点をいわき市にある“福島県赤十字血液センターいわき出張所”の2階に置いています。血液センターからは、従来から資材倉庫やイベントスペースとして活用していた一角をこの事業のために提供いただいているところです。いわき市は、福島県内で最大の人口と最大の面積を有する中核市となっていますが、血液センターに設置された現地事務所は、浪江町いわき出張所とも適宜連絡の取りあえる場所に位置しています。

この事務所に、日赤看護大学の教員のほか、北海道から九州までの全国の赤十字病院から2週間～1カ月間という期間にわたり交代で派遣される看護師らが日々集い、いわき市内に避難されている浪江町住民の元へ調査に出かけていきます。そして、調査を終えた後に再び集まり、活動の振り返りや意見交換を行って一日の調査が終了します。なお、現地事務所には、日本赤十字社本社看護部からも事務職員が派遣され、調査訪問の計画作成や本社・大学との連絡調整を行っています。このように、健康調査を進めていくにあたっては、**125周年**を迎えようとする赤十字の看護教育の実績と経験を基軸に置きながら、医療事業や血液事業といった日本赤十字社が展開する各種事業と大学との協働の下に実施されています。



何かと頼りになる血液センター浪江出張所長



2012.12.13 No.06



なみえの未来をしえん

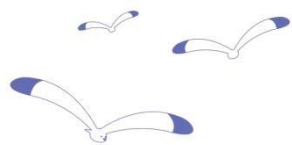
藤原紀香さんも協力



藤原紀香さんと一緒に話を伺う日赤調査員の齋藤正子さん(右奥)

11月7日、日本赤十字社の広報特使を務める女優の藤原紀香さんが健康調査に同行されました。今回調査訪問した家族は、被災後に浪江町から避難先を繰り返し移転し、現在はいわき市内のアパートで5人家族で暮らされています。近所には、おじいさんとおばあさんも住んでいますが、おじいさんの体調があまり良くなく、面倒を見ているおばあさんの元気のないことも気がかりとのことでした。訪問当日は、このおばあさんもアパートに来ていただきました。紀香さんは、おばあさんの避難生活の苦労を聞き、相槌を打ち「本当に会えて嬉しい。元気がでました」というおばあさんの言葉に笑顔で応えていました。また、息子さんがEXILEのファンという話から、紀香さんが番組で共演した話を聞くと、息子さんがとても嬉しそうな笑顔を見せたのが印象的でした。紀香さんのおかげで、満面の笑み・嬉しそうな姿をみることができ、私たち調査員も非常に心が和みました。

私たちはいわき市に避難されている世帯を戸別訪問し、健康状態の実態把握だけでなく、慣れない土地で生活されている方々の健康相談やこころのケアを含めた聞き取り調査を行っています。調査の結果、フォローアップが必要な方には、医療受診を勧めたり再訪問を行っています。又、必要に応じて浪江町の保健師を通してこころのケアセンターにつなぐなどの連携体制をとっています。これまでの調査結果から、長引く避難生活のストレス、生活再建などに対する先の見えない不安、仕事なくなるなどの役割の喪失などにより、身体的・精神的症状が増加しているのではないかと考えられます。今後もこの訪問調査を行うことで、被災されて避難生活を送られている方々のニーズをお聞きして少しでもこころが穏やかになり、さらに健康の維持・増進や病気の予防に繋がるような支援をしていきたいと思っています。



2012.12.6 No.05



なみえの未来をしえん

浪江町の今は



津波の傷痕も手つかずのままの警戒区域にある浪江町内
遠くには福島第一原発が望める(日赤調査員撮影)

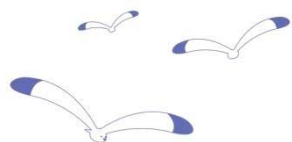
浪江町は、福島県の東側（浜通り）に位置していますが、東京電力福島第一原子力発電所事故により全住民が今もなお町外に避難しています。そのうち、約3割が福島県外への避難となっています。小中学校に通う児童生徒数も、約1,600名の4割以上が福島県外に避難している状況です。町は大きく、東半分が原発から半径20km圏内の警戒区域に、西半分が計画的避難区域（居住し続けた場合に1年間の積算線量が20mSvに達する恐れがある地域）に二分されたままですが、今後は、年間の積算放射線量に応じ「避難指示解除準備区域」、「居住制限区域」、「帰還困難区域」の3区域に再編される見込みであり、損害賠償や除染、インフラ、雇用等の生活再建策が課題となっています。

浪江町では、今年10月に町民の生活再建とふるさと浪江の再生に向けた具体的施策等を示す「浪江町復興計画」を策定しました。町民の健康管理や町外コミュニティの設置に向け、日本赤十字看護大学の支援が役立つことが期待されます。

日赤との窓口となっていていただく浪江町いわき出張所の深野真広主査。浪江町役場のある二本松市と
いわき市を往復する
日々が続いています。
今年9月の調印式では
大学に来校されました。



赤枠が浪江町
青枠がいわき市



2012.11.29 No.04



なみえの未来をしえん

住民に寄り添う調査

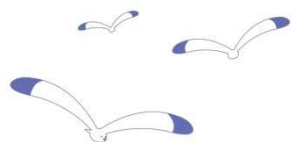
時には、調査票へ記載する手を止め、住民の方のお話を傾聴します



健康調査のため、ご自宅を訪問して住民の方から震災当時のお話を伺う守田美奈子学部長(上)と伊藤尚子講師(左)

いわき市内に避難されている浪江町民の方の中で、3歳以下の乳幼児や65歳以上の高齢者がいらっしゃるご家庭にあっては早急な状態把握が必要であるとして福島県（相双保健福祉事務所）による健康調査が実施され、継続的なフォロー体制が取られています。しかしながら、その狭間にある4歳以上64歳以下からなるご家庭については、浪江町にも健康上の情報がなく、保健ニーズに答えられないのが現状です。そのため、日本赤十字看護大学が行う調査では、正にこの行政の手が行き届かない層をターゲットとして行い、行政に代わり住民の方々の健康状態を把握し、浪江町に引き継ぐ役割に担っています。**質問は**、震災時から幾多の避難を繰り返し現在に至るまでのご家族やお住まい・お仕事のこと、身体のみならず心の健康状態に関すること、日々の生活の様子や悩みごとなどについて、丁寧にお尋ねしていきます。

調査後には、チーム内での検討を踏まえ、浪江町の保健担当者に情報提供するとともに、調査結果については、日本赤十字看護大学が分析して、浪江町の健康支援システム構築につなげていくことになっています。



2012.11.22 No.03



なみえの未来をしえん

いよいよ調査が開始されました！

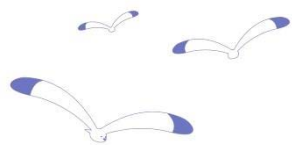


守田学部長からしっかりと調査用バッグを託されるのは地域看護学の澤井講師です(写真左下)。このプロジェクトに当初から関わっていた澤井講師や伊藤講師、本学大学院修了生の齋藤看護師、北見赤十字病院から派遣された弥富看護師らが最初の調査員として訪問に出発しました。

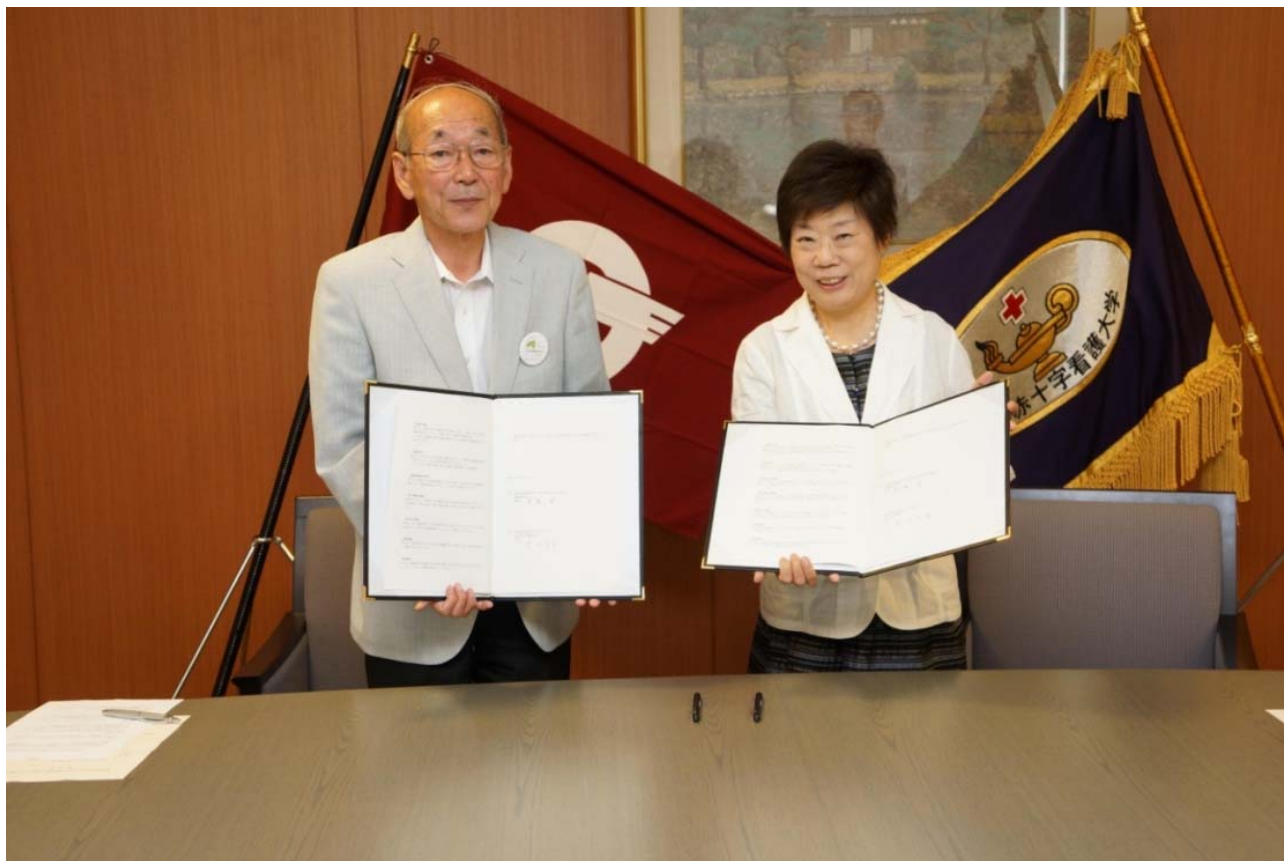
日本赤十字看護大学では、いわき市内にある福島県赤十字血液センターいわき出張所に健康調査の拠点を開設しました。10月15日に開催された事務所開所式に駆けつけてくださった檜野浪江町副町長は「漂流するような避難生活が続き、人と人との寄り添いを待っている町民にとって日赤による戸別訪問は本当に心強いことだ」と住民の気持ちを代弁されました。当日の様子は地元テレビでも紹介されるなど、浪江町民の期待はとても高いものがあり、私たちも強い使命感をもって調査に臨んでまいります。



事務所開設を宣言した守田学部長と浪江町の檜野副町長(右端)



大学が福島県浪江町と協定を締結！



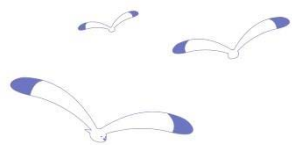
浪江町の馬場有町長と並んで協定書を手にする高田学長(右)

日本赤十字看護大学では、福島県浪江町からの依頼を受け、日本赤十字社と協力していわき市内に避難している浪江町住民の健康支援を始めることとしました。具体的には、健康状態とニーズを調査し、ケアを提供すること、そして行政とともに健康レベルやニーズに応じたケアやサービスのシステムを構築することです。生活とコミュニティの基盤を奪われた住民と町がそれぞれの力を回復し、協力的な関係のもとにケアやサービスの授受がなされる、そのような将来を目指す支援です。この考えのもと、浪江町と大学は今年 9 月 18 日、支援の内容等に関する協定を締結し、事業開始に向けた準備を整えました。

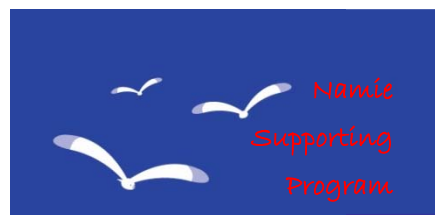
なお、この活動は東日本大震災の復興のために海外から日本赤十字社に寄せられた救援金を財源としています。



協定締結後に大学内を見学する
馬場町長(右)



2012.11.8 No.01



なみえの未来をしえん

日本赤十字看護大学では、今なお原発事故で苦しむ福島県浪江町の住民の方の健康を支援していくこととなりました。長期にわたるこの支援活動について、これから適宜情報発信していきます。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故以降、原発周辺にある双葉 8 町村の住民の多くは、長期にわたり他地域での避難生活を続けています。特にいわき市内における避難住民の数は 2 万人を超えています。日本赤十字看護大学では、今年 1 月から地域看護学領域が中心となって、平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究」の分担研究として「福島県いわき市区域に所在する東電福島第一原発周辺町村住民の保健ニーズへの対応に関する研究」に取り組みました。http://www.redcross.ac.jp/saigaishien/docs/saigaishien_fukushima.pdf

私たちは、避難住民宅（1,200 世帯）を巡回調査し健康支援活動を行いました。震災後疲弊しながらも業務を続けている行政職員への配慮とともに、約 3 ヶ月間にわたり活動を続けた結果明らかになったのは、度重なる避難や長期的な避難生活が高血圧や不眠などの症状を引き起こしている現状や必要な医療・保健サービスを受けられない状況などでした。

中でも汚染がひどく早期の帰宅が困難な状況にあったのが**浪江町**です。同町の仮設住宅は町役場の移転先である二本松市内及び周辺自治体に設置されましたが、気候や環境の違いから、慣れ親しんだ浪江町に近いいわき市内に移り住む町民が増加しています。一方で、いわき市内で浪江町民が暮らす「借上げ住宅」は広域に分散して住民同士が集う場も少なく、孤立化しやすい状況にあります。町役場機能も限定されているため、避難住民に対する行政サービスが十分にいきわたらず、中でも保健衛生サービスの滞りは、町民の不安感を助長させていました。そこで、研究が終了した今年 4 月以降は国際・災害看護学領域も参加して、浪江町関係者との関係を育みながら、私たちのできる支援の在り方について協議を重ね、全戸を家庭訪問して健康調査を実施し、ケアリングや相談により住民の方の心身の健康を支えていこうと決断したところです。

放射能の影響による避難生活はこれからも長期に続きます。日本赤十字看護大学では、125 年を迎えようとする質の高い看護実践の知識と経験を活かし、正に苦しんでいる人を救おうという赤十字の中心理念である人道の原点に立ち返り、浪江町の住民の方の未来を少しでも支援できるよう、看護の手を差しのべて参ります。

